

Lifesaving World Championship 2018 報告書

2019 年 1 月

平藤昌寛、齊藤愛子

1. オフィシャル登録～事前準備
2. 会場入りから大会開催までの流れ
3. 審判について
4. プール審判
5. サーフ・IRB 審判
6. 器材・設備
7. Presentation and Award ceremony.
8. Gala dinner.
9. その他
10. 感想と今後参加される審判へのメッセージ

Lifesaving World Championship (LWC) 2018 は過去最多の 44 の参加国、約 9,000 人の地元ボランティアの関わりがあり、経済効果は\$20,000,000(約 16 億円)という過去最大の規模で実施されました。

1. オフィシャル登録～事前準備 (齊藤愛子)

世界大会は毎回、開催の 1 年以上前に審判の募集を締め切ります。この際に、希望するセクションを伝えます(マスターズ、オープン、ユース、インタークラブオープン、インタークラブユース、IRB、Surf Boat)。LWC2018 の審判登録締め切りは 2017 年 8 月 31 日でした。登録締め切り後から LWC2018 イベントディレクターの John Martin より 1-2 ヶ月に 1 回のペースで全審判に向けて情報共有のメールが送られてきます。

最終的な審判の配属決定は 2017 年 12 月末日に決定し周知されました。基本的に希望は通るイメージですが、登録審判の人数が多かったため、プールだけの担当、サーフだけの担当、と割り振られる人が多かったです。

その後、LWC2018 では選手、審判、コーチおよびマネージャーなど、関る人の登録はすべて OrgaNet というサービスを利用して行いました。ここで、個人情報、宿泊施設、フライト情報とピックアップサービス希望の有無、その他 ILS の主催する大会期間中のイベントの登録(出席する場合)などを行います。手順が書かれた手引きがあるので、それを読みながら各自が登録します。

他にはユニフォームのサイズ希望調査、現地の詳細な情報(気候、言語、為替、電圧といった旅行基本情報に加え、医療機関や緊急連絡先、それぞれの会場の地図など)が共有されました。初めて参加する人、初めてその国や都市に行く人にも親切に、事前に情報が共有さ

れます。わからないことは質問すると、迅速にメールで返信が返ってきたので、非常にありがたかったです。

2. 会場入りから大会開催までの流れ（齊藤愛子、平藤昌寛）

アデレード空港に到着すると、現地ボランティアが自分の名前の書かれたボードを持って出迎えてくれ、宿泊施設まで送迎してくれました。ただし、帰国の際は各自で手配が必要でした。

到着したらサーフ会場近くにある **Glenelg Community Centre** で、写真を撮って名前、写真入りの ID タグを作成し、会場の出入りの際には常に身に着けることになります。このとき、審判ユニフォーム(シャツ 2 枚、ハーフパンツ、上着、キャップ、保冷バッグ、リュックサック)が配布されました。

自分の担当する大会が始まるまでは、全体の審判ミーティングに参加する以外は自由行動となります。審判ミーティングではルールの確認などは一切なく、審判として参加することへの感謝と労いの言葉の後、審判長や副審判長などの紹介があり、解散となります。セッションごとの具体的な確認ブリーフィングは、プール、サーフとも大会当日の朝に行います。



写真左：名前の記載されたボードを持って、ボランティアが出迎えてくれる
写真右：LWC 事務局は、ビーチのすぐそばにある



写真中央・右：登録専用デスクで写真を撮り、ID タグを作成する

写真左：事務局には配布されるグッズがずらりと並び、ネームタグがついている



審判に配布されるグッズと ID タグ

写真左：リュックと保冷バッグ、写真中央：シャツ、ハーフパンツ、上着、キャップ

写真右：写真入りの ID タグ（大会関係者、参加者は全員作成し身につける）

オープニングセレモニー(11/20)

街の中心 City Hall 横から、セレモニー会場である Champs Hub への約 300m を、伝統のバグパイプ楽団を先頭に、各国選手・役員に続き、競技役員(Official)が行進します。その周りをたくさんの観客が讃えます。競技者だけでなく、競技役員も主役の一人であるというスタンスを感じることができ、非常に誇らしく心地良い時間となりました。こういった演出が憎いですね。



ILS 会長 Graham Ford 氏オープニングご挨拶

パレードを楽しむ日本からの審判



たくさんの観客が選手・役員をを讃えます

バグパイプ隊が素敵です

3. 審判について（齊藤愛子、平藤昌寛）

LWC2018 の審判は 28 の協会から約 320 人の登録がありました。平均年齢は 57 歳、女性 は 33%。Surf Lifesaving Australia (SLSA)からの審判が最多で 160 人、Royal Lifesaving Society Australia (RLSSA)からが 19 人、New Zealand および Canada からが 17 人ずつ、と続きます。ライフセービング協会は小規模ながらもケニア、イラン、シンガポールなどからも審判の参加がありました。日本からは最終的に 7 人が参加しました。

世界大会に参加する審判の平均年齢は今回に限らず高く、ベテラン勢が多いです。20 代 30 代で参加する審判はアジア勢に多い印象を受けました。マスターズに出場した後にオープンやユースの審判をする方もおり、競技をしている人は審判としてもジャッジのポイントや振る舞いにも長けている人が多いと感じました。

審判をする日の朝食と昼食は支給されます。朝食は海沿いの **Champs hub** という大きなテントの中でホットサンドとコーヒーなどが提供され、昼食は会場でサンドウィッチ、パン、チーズ、フルーツが入ったランチボックスが支給されます。メニューは 2 日ごとにかわりました（プールの場合は、審判の控え室にお湯と水が常備され、コーヒーと紅茶が自由に飲めました）。

プール競技の場合、予選が終わり、B 決勝と A 決勝が始まるまでに、約 2 時間の休憩時間がありました（2016 年のオランダのときにも 2 時間の休憩がありました）、プール審判はここで近くの店に買い物に出かけたり、サブプールで泳いだりすることもできました。他にも、競技の合間の休憩時間には、初めて会う人たちと挨拶をしたり各国の協会のバッジを交換したり、審判同士の交流を深めることができます。

サーフ競技の場合も、自分の担当エリアでの競技がないときは、次の集合時間が告げられ、自由時間となります。他のエリアを手伝いに行ったり、競技をみたり、少しゆっくりしたりと、自由に過ごすことができます。ただ、プール競技と違いサーフ競技の時間は非常に流動的かつタイムテーブルの変更はリーダー格の審判間のみで共有され、下まで情報がおりてこなかったもので、次に何の種目が行われるかを逐一確認する必要がありました。

また、毎晩競技終了後には **Champs hub** にて審判同士交流する時間がありました。”**Officials debrief**”と呼ばれるもので、参加は自由です。審判には毎日フリードリンク券が 3 枚与えられ、ワインやビールを片手に親睦を深める時間がわりとゆったりとられていて、ここで本当に多くの人と交流ができました。（ロビー活動@Champs Hub 参照）

ロビー活動@Champs Hub

各セクション審判員はその日の役目が終了すると Surf 会場浜側「**Champs Hub**」へ自然に集まります。朝配られる飲み物や軽食の **Voucher** で好みのものを引き換え、様々な仲間たちと交流を楽しみます。もちろん **Cash on deliver** でも購入 OK。日程によっては同じ場所にあるステージにて結果の出た競技の表彰式も開催されますので、皆で称え合い大いに

盛り上がります。ここでも名刺や各国バッジ交換します。私たちはほぼ毎夕ここにいました。
情報交換・仲間作りには最適ですね。



飲み物バウチャー



ある日のランチボックスの中身



IRB IL チームとマーメイド SLSC の Will さんと



20 年以上ぶりにグレッグ・ベネットさんと



Champs hub(外側)



表彰ステージ前の大きなテントが C.Hub

＜日本からの審判＞

齊藤愛子：プール（ターンジャッジ）、SERC（荷物運びや選手の誘導など）、サーフ（フィニッシュジャッジ、ビデオジャッジ）

平藤昌寛：サーフ(IRB ジャッジ)

泉田昌美：サーフ（フィニッシュジャッジ、ビデオジャッジ）

國木孝治：サーフ（フィニッシュジャッジ）

坂本千佳子：サーフ（ビーチレコーダー）

田中えりか：プール（フィニッシュジャッジ）、SERC（ジャッジ）

水川雅司：プール（計時）、サーフ（ビーチレーンジャッジ）

4. プール審判（齊藤愛子）

毎朝出欠をとり、競技開始時間の確認などの簡単なブリーフィングを行います。今回の担当セクションや気づいたことを述べます。

ターンジャッジ：

担当するコースのレーンジャッジとペアを組み、ジャッジを行います。ターンの際に失格がなければ親指をたてて **Thumbs up** のサインで **OK** の合図をペアのレーンジャッジに送ります。それをみたレーンジャッジも **Thumbs up** を返し、折り返し時に違反がないことを確認します。失格を見つけた場合は親指を下げて **Thumbs down** の合図をし、速やかにペアのレーンジャッジに伝えます。失格の用紙を記入するのは一貫してレーンジャッジとなります（たとえターンジャッジの際の失格であっても）。責任者がレーンジャッジとなっているような感じでした。

フィニッシュジャッジ：

タッチ盤、計時による手動計測、フィニッシュジャッジによる目視、と 3 つの方法で着順を確認します。1-4 レーンを担当するペアと 5-8 レーンを担当するペアにわかれてゴール時の着順を確認しています。イメージとしては、サーフ競技のレスキューチューブレスキューやレスキューボードレスキューの際に、ブイに到着して選手が浜に向かって手を挙げたときに、そのブイの色を無線で浜側の審判に伝える感覚と少し似ていると思いました。動体視力が必要なポジションです。

ラインスロー：

計時がスタート時の姿勢などスタートとゴールを担当します。レーンジャッジは投げられたロープをペイシェントが正しくつかむかを確認します。ターンジャッジはロープをつかんだ後、ペイシェントが引っ張られる際にロープを正しく握っているか確認します。つまり、それぞれのレーンに 3 人のジャッジが配置されました。

ラインスローには障害のネットがそのまま使われ、準備の時間が短縮されていました。

SERC：

各チームと通訳 1 名(必要な場合)がロックアップされます（監督は NG）。今回のシナリオは、川にピクニックに来ている人たちが川で遊んでいるときに溺れてしまうという内容で、非常にシンプルでした。50m プール全面を使用してシナリオが展開されます。

ジャッジは固定で、英語圏と非英語圏のメンバーがペアを組んでジャッジにあたるようにしています。以前は英語圏のジャッジがほとんどでしたが、非英語圏のジャッジも加わる

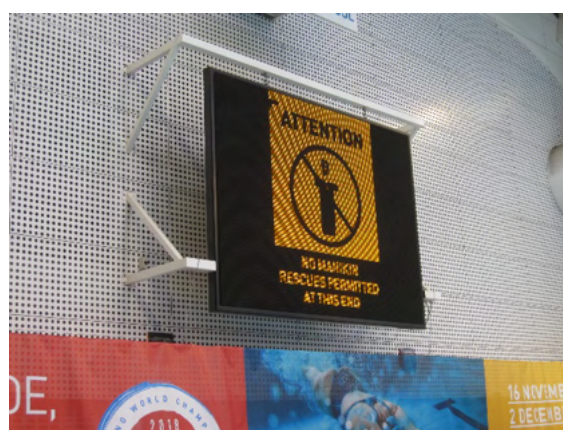
ことで、言語の違いが理由で非英語圏チームが不利になるということを避けるねらいがあります。



South Australia Aquatic and Leisure Center (SAALC)



SERC に向け目張りを行うボランティア



電光掲示板を活用し選出注意喚起している



ターンジャッジとレーンジャッジのペア
1コース/2コースのメンバー



プール審判は日本から3名参加

5. サーフ・IRB 審判 (平藤昌寛)

Judge in Boat (IRB ジャッジ) を仰せつかり、参加予定の Ocean National Youth (2 日)、Ocean National Open (2 日)、加えてメンバー足りずと、現場判断での Ocean Inter-club Youth (2 日) の計 6 日間お手伝いさせていただきました。簡単ですがその目線から情報共有をさせていただきます。

・メンバー

私(アラフィフ)よりも ほぼ、5 歳から 20 歳年長のおじさんらが中心(私のバディーでパースからのトレバーさんは、1968 年からこの活動をしていると！私ほぼ最年少)、もちろん地元ホストクラブからの若手参加もありますが、メインは、GB Wales、近隣 SLSASA、NSW、Gold Coast、West AU(パース)、他 オランダ、そして JP(私)の連合軍でした。指揮を執るのは、総勢 10 名ほどの GB メンバーで、世界大会ではこのメンバーが各国をめぐり、仕切ることが多いとのこと。(やっていることは一緒です)



(*ザックリ早朝打ち合わせのおじさん達)

・一日の流れ

朝 0630 に器材置場にあるテントに集合、メンバーリストとパトロールログに名前を記載、その後、IRB・モーター・備品のチェック、4WD トラックやバギーにてビーチへ運搬。(すべて動力もので移送のため労力かからず、おじさん達にも優しいです)

0730 にテントにてブリーフィングにて、気象・海象・干満時間の共有、役割配置、一連の流れ等を確認し、ビーチへ移動します。自艇コンディションを再度確認、出艇。一旦担当エリアのビーチジャッジ責任者へと向かい、打ち合わせし、その後はそのまま沖でした。浜に帰ることなく、途中、コーヒーとベーコンエッグサンドイッチが、沖のジャッジや Water Safety に配られるといった具合です。競技終了し、器材置き場へ返却後、器材を確認、パトロールログへ終了時間を記載し、解散となります。

「じゃ、あとでHub でな」というのが合言葉な感じでした。(やはりやっていること一緒です)

SURF LIFE SAVING PATROL LOG

Date: 28/1/18 Beach Name: LWC 2018

Mon ☐ Tue ☐ Wed ☐ Thur ☐ Fri ☐ Sat ☐ Sun ☐

AM ☐ PM ☐ Tide Time: High _____ Low _____

Patrol Type: _____ Patrol No: _____

Award or Duty	Registered Members Name (please print) Surname Given Name	Substitutes Name (Please print)	Signature	Patrol Type make-up/print/primary/substid	TIME ON	TIME OFF
IRB	CARTER MICHAEL		[Signature]	VOL	6.15	
IRB	STANTON WILLIAM		[Signature]	VOL	0615	
IRB	ASHLEY CLARKE		[Signature]	VOL	6.15	
IRB	GIBB TREVOR	NORTH COASTS LWS	[Signature]	VOL	6.30	
IRB	BAWDEN DEREK	SEACLIFF	[Signature]	VOL	6.50	
IRB	MASA AITO	NIYAHAMA	[Signature]	VOL	6.55	

(*Patrol Log(Name/Club/Sigh/In Time/Out Time)を記載)

・配置/役割

- ①Judge in Boat(ジャッジ専門) → 各エリア IRB 1 艇
 - ②Water safety (安全課専門) → 各エリア IRB or PWC 1 艇
 - ③Duty(コース・ブイ調整専門) → 全エリア IRB 1 艇
- (③Duty 以外は、各 Water エリア(スキープイの色、緑黄色、白黒、赤など) で振り分けし、一日ほぼ交代なし)

AM	PM	GREEN BOLD	PINK RED	BLACK & WHITE	PIER	SURF BOATS	SKIPPER FOR DAY
JUDGE	JUDGE	JASMINE LAMB	TREVOR GIBB		PIER	JIM ROSEMARY	DRIVERS
		GWYN	MASA		PIER	NICK CARTER	BLUE
SAFETY	SAFETY	DEREK BAWDEN			PIER	TOM PARRY	CREW
		CLARE HARKNESS			PIER	ALEX PARLE	GREEN
DUTY	DUTY	BUTCH	DAVID MURPHY		PIER	TIM KAVANAGH	
PM	PM	IAN JAMES	RECHARD CASTLE	CREW (RED) EATHER AREA	PIER	SCOTT MATHER	
JUDGE	JUDGE	JASMINE LAMB	TREVOR GIBB		PIER	ANTHONY KANE	
		GWYN	MASA		PIER	BARNEY	
SAFETY	SAFETY	DEREK BAWDEN			PIER	MEG ANN JAMES	
		HEATHER			PIER		
DUTY	DUTY	BUTCH	DAVID MURPHY		PIER	TIM KAVANAGH	
		IAN JAMES	RECHARD CASTLE	CREW (RED) ANY AREA	PIER	SCOTT MATHER	
JUDGE	JUDGE	RWC 1			PIER	RWC 2	
EARLY	EARLY	WARREN FAY	*		PIER	NIGEL BISSSET	
MED	MED	GRAY HUMPHREYS	*		PIER	LYNDON MELOE	
LATE	LATE	WARREN FAY	*		PIER	NIGEL BISSSET	

(*ザックリすぎる配置リスト 「Masa は、AM/PM ともそのままがんばりなさい」と)



(*Coffee time@沖) ←沖は寒いので結構楽しみ



・審判方法

上述の通り、Judge in Boat (IRB ジャッジ) は、ほぼ沖待機にて審判。その際、各 IRB に、白玉小ブイ・ロープ・アンカーを配備、臨機応変に停船用に使用し、そこからブイ周りのジャッジを行っていました。もちろん High Surf 時は定点ではなく動き回る必要があるでしょう。



(*停船用ブイセット)



(*トレバー先輩)

スターターやビーチジャッジと IRB ジャッジのコミュニケーションは、ほとんどありません。

IRB には Radio (トランシーバー) も携帯していますが、特別なことがあった場合のみで、我々が行うようなやり取りは、普段ほとんどしないようです。「次の競技は何々です」「全部で何ヒートです」「このヒート何人でスタートします」や 都度ヒートの「ブイ周り All Clear です」などと言った細かな情報共有はしないようでした。

レース中に選手がコース間違えたなど特殊事情（DQ等）があった時のみ、急いでビーチへ戻り、直に、ビーチジャッジ責任者へ明細を報告するといった方法でした。（間違いがないようにということなののでしょうか）

加えて、大まかな全体競技タイムスケジュールはありますが、実際は無いようなもので、ビーチの状況、選手の集まり具合などで、いい意味で、臨機応変にどんどん変わっていきます。競技エリア自体さえも変更される場合もありました。（選手にはストレスでしょうが文句は出ません）

そういったことなので、常に沖からビーチの状況を見て、浜でのコース準備や選手の集まり具合で、判断せざるを得ませんでした。つまり状況把握は、ほぼ沖にて、自分らの経験からくる判断が必要になります。

その部分での、みなさんの全体の対応力は、気にしないのか、いつもそうなのか、「まあこんなもんさ」的な、まさに臨機応変な運営をしていることが、ちょっと「すごいな」（意味：おい、大丈夫か？）と驚いたことを覚えています。正直、規模は違うとしても、我々の競技運営力を（胸の中で）誇りました。

一方、沖でのジャッジング姿勢については、かなりシビアに行っている印象を受けました。

例えば「じゃ俺第一ブイ見てるぜ」「最後のブイ頼む」など、しっかりとコミュニケーションをとって高い目線から死角がないよう心がけていました。また、万が一の為にメモをとっている場面もありました。その部分は、IRB ジャッジとしての責任をしっかりと意識されていました。

・水回り器材

各クラブ競技者の Equipment (Surf Ski・Board・Surf Boat) 含め、IRB、モーター、大会に必要なブイ関連すべては、浜から約 300m ほどの、草野球ができるほどの芝生スペースにフェンスを囲み、セキュリティーが確保された場所に保管され、都度そこから出し入れされます。もちろん夜間は警備員つきです。



IRB・モーターは各近隣協力クラブより集められた約 10 数セットあり、その日のエリアの数に合わせ、必要艇数をビーチへ移送します。IRB は、アキレス製、サンダーキャット製、ゾディアック製。モーターは、トーハツと同社 OEM のマーキュリーのみ。すべて 2 ストロークの 25 馬力。（あと数年で AU でも 2 ストローク販売がストップするらしく心配する声が漏れていました。）



(*近隣クラブから集められた IRB 壮観ですね)



サンダーキャット



ゾディアック



アキレス

一方、ブイやロープ、アンカーなど細かい水回りの器材の管理は、同じ保管敷地内の「Gear」と呼ばれるチームが、保管・メンテ・ビーチ間の移送に責任を持ちます。ここにもたくさんの それ好きな職人さんがおりました。もちろんこちらも みなさん私より先輩です。ちなみに、彼らはブイのことを、円柱計の缶に似ていることから「Cans」と呼んでいました。



(*Gear チーム親方)



(*器材トレーラー: これごと各地会場を移動します)



(*IRB チーム用職人トレーラー これほしい)



(*各クラブの器材トレーラー 大陸各地から 遠くは数千キロを走り数日かけて集まりました)



(*アンカー)



(*アンカー やはり鎖が効きます)



(*連ブイ用大きめ鎖つきアンカー、トリックブイは金色)



(*Cans)



(*トリックブイ 蛍光オレンジ)

・ブイ設置方法

我々が行う方法とほぼ変わりませんが、いくつか工夫点を挙げてみます。

- ①基本的に上述役割の「Duty」が、距離含めたブイ調整をほぼ1艇で担当していました。
- ②Swim連ブイ(Cans)は両サイド鎖付きアンカーにて、固定ロープ設置後、後からCansをクリップ(カラビナでカチッ!)していく方法です。連ブイ用ロープとCansを分けて沖に移送、設置することにより、High Surf時における連ブイ設置時のリスクを軽減できるかもしれません。ロープだけですと沈みますので、数個Cansを付けておく必要はあるでしょう。また、センターを決める際に、ロープ設置時に、例えば 中心の青白のみ付けておくことも良いかもしれません。
- ③すべての鎖つきアンカーには、単独ブイ(Cans)含め、トリックブイが付いており、そのトリックブイ玉ブイは、エリア毎に、単独・同一連ブイ毎に同色(蛍光緑や蛍光ピンク等)にペイントされていました。それによりブイ調整時に発見が容易になります。エリア間の距離が近かった印象でしたが、このことによりブイ調整オペレーションも容易ですね。
- ④単独のSkiやBoard競技に併せ、スイム連ブイ両サイドのCans(例えば第1-3、第7-9)を外し、コースをクリアにします。沖のSki用Cans、Board用Cansに集中でき、且つ連ブイロープにラダーが引っかかる不安を和らげ、出来るだけ競技者のストレスを軽減している気遣いがありました。もちろん両サイドが沈んでしまう為、第1と第9に目印用の小さな玉ブイをクリップしておきます。一方、レスキュー競技も最大11チーム一括で行えるよう連ブイに11 cansを付けました。10、11Cansは結束バンドで固定です。



(*Swim連ブイ Cansは後からくっつけます こちら11 cansあります レスキュー競技11チームいっぺんに行うためだそうです どこまでも臨機応変なのです)

⑤スイムブイ (Black&White) を 4 個の連ブイで設置します。

確かに単独 2 個よりも 設置しやすく、コースを回る選手にもわかりやすいと感じます。

波が上がらない環境であれば非常に有効と考えます。



(*白黒ブイ 4 つあります 連ブイです もちろん第 1 第 4 間の距離は規定通り)

・サーフ審判

(ほとんど沖でしたので遠目で気がついた点を共有いたします)

各エリア責任者が経験値豊富なのか、権限委譲がしっかりされているのか、都度セクショナルジャッジや更に上に確認や承認を取らず、エリア毎の判断で(勝手に?) どんどん競技を進めていたのがとても印象的でした。

また、マスターズレース観戦中、サーフレースにて、海に向かって左側からスタートし、第 9 ブイから第 1 ブイへ泳がせるというコース取りをしていました。海況なのか沖の風向きなのかビーチ状況なのか、安全が確保され、選手へのしっかりした説明と納得が得られれば問題なしという、エリアジャッジの臨機応変な判断だったのかもしれない。



(*第一ブイからゴールに向かっていきます)

また、やはりマスターズ時ですが、着順コール後、ジャッジの引いたビーチラインに、競技者自身で勝手に並んでもらっていました。競技者も慣れているのでしょうね。

沢山の先輩のみなさまが笑顔でゴールする姿は温かい市民マラソンのような雰囲気を感じました。



(*「どうぞ勝手にお並びくださいな」)

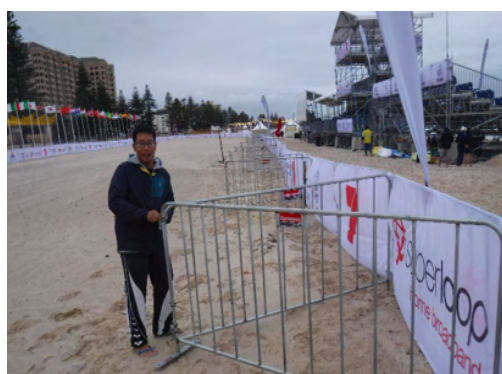
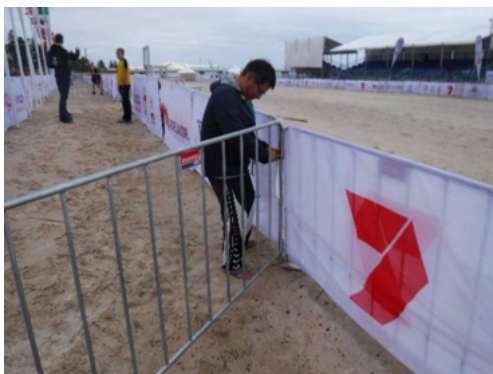
競技者の中には耳の不自由な方もいらっしゃいます。その為、通常スターター以外に、フラッグにてスタートを合図する担当もいらっしゃいました。



【その他】 (心に残るところを ざっくばらんに)

・会場整備お手伝い(11/20)

その日まで晴天続きのアデレードに、テントやフェンスが舞うほどの「50 年に 1 度(メディア談)」という大ストームあり。運営本部からの呼びかけで、翌朝 0600 より修復のボランティア募集要請。なんだかんだ集まったのは、ホストクラブ 10 名ほどと、我々日本人 2 人。この金属製フェンスは優れモノ。



(*罪滅ぼしの MM 氏)



(*早朝作業を一緒にした地元ホストクラブのスティーブ先輩「ありがとな助かったよ」と)

・IRB 仲間

今回、各国・各クラブの IRB 乗りと浜仕事を一緒にできたことは今後の財産になるでしょう。また様々なクラブの IRB 責任者とも交流ができました。ありがたく大事にしていきたいと考えます。



(*GB IRB 職人軍団・各大会をパッケージで周ります)

(*右の Botch さん ブイ設定を 1 人でしていました)

(左 Wales の親方)



(*IRB チーム(AU 各地からのおじさん)



(N.バレーの IRB 親方 Jeff さん)



(*IRB チーム)



(*GB コーチ Peter さん)

6. 器材・設備（平藤昌寛）

会場は一言でいうと、「まったく参考にならない(M 団長談)」ほどのとんでもなく素晴らしいものでした。過去最大規模の世界大会。州や SLSASA が総力を挙げて準備されてきた意気込みを感じました。

・メイン Surf 会場



(*Surf 会場センター・両サイドに観客席もありました)

(*Surf 会場 桟橋からこちら北側は 4 面張れます)



(*Surf 会場浜側のビーチ会場)



(*大きなドーム内に設置された選手用テント村)

・動力

バギー3-4台と4WDトラック1台にて、IRB・モーター・他器材移送だけでなく、各エリア競技役員への水分供給や、ブイ調整などの各エリア測量、Surf Boat 移動など、広い会場を縦横無尽に動き回っていました。



(*器材はすべて動力もので移送のため労力かからず、おじさん達にも優しいです)

・燃料補給



(*器材保管施設内に危険品エリアを区切り、かつ 芝生にガソリン・オイルがこぼれない様に最新の注意を払う)

・モーター洗浄

ちょっと大きめの水槽です。4面にモーターを設置できますので、一度にまとめて洗浄できます。ただ、「毎日使うし、いちいちモーター外すの面倒だよな」時、トーハツの場合、この部分のボルトを外し、エンジン回しながら直接水を入れ洗浄するやり方をしました。



(*一度に4機 Motor 設置できます)



(*めんどくさい時は、この部分から入水洗浄します)

・気になる器材①: Surf スタート用セット with ロープ(仮称)

競技ごとのスタート幅に合わせて、予め印のあるところまで広げて、余分なロープは巻いておく代物。そのまま浜に刺しておきます。また、レスキュー競技でも、各ブイの色をプリントしているので、フルに広げて、そこに合わせてペグを刺すだけです。



(*浜に刺しておける優れモノ)



(*反対側)



(*あらかじめラインにマークをつけときます)



(*マークのところにペグ立てます あっという間に出来上がり)



(*完成図)

・気になる器材②: 波打ち際ポール自立固定スタンド(仮称)

金属製で、浜に刺せるタイプ。定位置に固定した後、中心部分にポールをさし、人(ポール牧さんら)が持たずして立てておける代物。High surf 時はダメですね。



(とんがった先を波打ち際に刺します その後ポールを真ん中の穴にさして完成 これ位の波は大丈夫)



(*こんな感じで設置します)



・気になる器材③: 大きなコースフラッグ

(IRB/Surf Boat 会場です 目立ちます)

・気になる器材④: 昔の銭湯にあったような洗いや着順札(ビーチでも Surf でも)

所変われば器材も変わる どんなものでもよいのですね といういい例かなと 工夫は大事ですね



(*笑顔でモデルありがとうございます)



(*美女と銭湯札とビブス)



(*アイス棒風のコースくじ)

・観せるコース作り

オリンピックを意識した新競技コース作り(M字型)に加え、トランジット時に競技中の選手ギリギリまで観戦できるコース作りは、競技の迫力を伝え、観戦マニアを増やす非常に魅力的な考えです。そろそろ観客目線での運営も必要かと。是非日本でもやりたいものです。



(*トランジットエリア 選手の頑張りを目の前で観戦できます)



(*M字後半の Board)

7. Presentation and Award ceremony (齊藤愛子)

オープン・ユースの競技がすべて終了した翌日の夜、審判を対象にした表彰式が Champs hub で開かれました。ILS 会長の Graham Ford 氏をはじめ、ILS Sport commission の David Thompson 氏、John Martin 氏、Gleg Alum 氏から審判へ感謝の気持ちと労いの言葉が送られました。個人的に知り合いでもあったため、直接ご挨拶すると、”Did you enjoy?”と、声をかけていただくことが多く、みんなにとって楽しい大会であるようにしたいという想いが伝わってきました。それが、次回以降の審判参加のモチベーションに繋がると思います。2016 年のオランダでも、”Are you okay?”と、競技の合間に審判に声をかけてくれたオランダの Jolanda 氏を思い出しました。とにかくそれぞれが周りの仲間を大切に、チームワークもよいので、本当にあたたかな気持ちで審判として参加することができました。

この表彰式では、LWC に審判として参加した回数によって ILS のバッジが表彰者に贈られました。3 回：銅バッジ、5 回：銀バッジ、8 回：金バッジ、10 回：プラチナバッジ、12 回：ダイヤモンドバッジ。表彰対象者はとても誇らしそうで、うれしそうで、見ている私たちも幸せな気持ちになりました。次回の LWC に審判参加すると、私も銅バッジがもらえるので、楽しみにしています。

18時から開始され、21時を過ぎても話は尽きません。この日だけはドリンクも飲み放題、フィッシュ&チップスやバーガー、マグナム（オーストラリアのアイスクリーム。とてもおいしいです）、さらに焼き鳥も振舞われました。LWC を通じて知り合い、2 年ごとに再会する審判の仲間たち。こうした機会を創っていただき、とても感謝しています。



ILS 会長 Graham Ford 氏



ILS Sport Commision を代表し David Thompson 氏



会場の様子



表彰式でバッジ授与



表彰された審判の皆様



Solly 氏も表彰されていました

8. Gala dinner（平藤昌寛）

11/22(木) 18:30～ Morphettville Racecourse, Adelaide

ILS 主催のパーティー”Gala Dinner”に参加させていただきました。

世界大会時に、大会開催祝賀、功労者表彰、ならびに各国役員との親睦を深める目的で行われます。日本よりは、入谷理事長、宮部スポーツ本部長(団長)、相澤千春 ILS 理事、西浜平藤の出席でした。その際、ILS、SLSASA、各国役員出席の中、我々が相澤千春理事へ、長年の功績を讃えられ、ILS 「Knight」の称号が授与されました。本当におめでとうございます。その受賞瞬間を目の当たりにし、非常に誇らしく感慨深い思いに浸ることができました。顔の広い入谷さん、宮部さんも、積極的に各国役員とコミュニケーションをとられ、さらなる JLA・日本チームの存在感を示されていました。私自身も所属クラブ

名刺を配り歩き各チームと親睦を深められたと思います。たくさんのヒントが得られる非常に素晴らしい機会と感じました。選手も参加されている国もありました。次世代を担う若いみなさまにご参加いただき、競技だけではなくこの部分からも視野を広げられればと考えました。今後、より多くの日本メンバーも参加されることを期待したいと思います。



(*我らが千春さん)



(*メインのチキン うまかった)



(*Knight 受賞者みなさま)



(*日本からの出席者 韓国チームの Kim さんと)

9. その他（平藤昌寛）

Seacliff SLSC 訪問

宮部団長ご図らいによる、日本からのジャッジ・競技オープン参加メンバーでの、隣接クラブ表敬訪問。会場から南に2つ目のSurfクラブ、Seacliff SLSC。2階レストランにて夕食とBeer/Wineを堪能。レストランスタッフみなさんはボランティアだそう。ここでの売り上げがクラブ運営にまわるのでしょうか。とても心地のいいクラブでした。ちょうど夕日が素敵な時間帯で参加者みな大いに感動でした。

ここだけではなく、100年以上も昔から、国や州の政策で、海沿いの土地をただ同然で貸し出し、各地元クラブは、上物のみを建造、SLSCを運用するというのが当たり前のようです。このあたりは「全く参考にならない」文化の違いでありますね。



(*クラブ正面 1F 器材倉庫 2F レストラン)



(*2F からの素敵なサンセット)



(*一番奥のビッキーさん手配の予約席)



(*お食事風景)

IRB 競技(11/29)

記念すべき第1回国別対抗を応援。

とにかく安全第一をベースに考えられたルールです。動力ものは一度使い方を間違えると「凶器」にもなり得るものという考えがベースなのでしょう。細かな厳しいルールの中で、渡辺ユキオ監督率いる日本チームは大健闘を見せました。

観戦中、各競技トップとの差はあまり感じられなかったのですが、そのほんの数メートル・数秒が大きな実力の差となる競技なのだと痛感しました。テクニックは十分対等なのですが、共通器材(Boat の特性他)への応用力など、さらに一つ一つ詰めていくことにより、確実に入賞を狙える実力を有しているチームであると確信しました。今後の為に、大いなる「轍」を創ってくれたわけですね。今後もできる限り、関わり、応援していきたいと強く感じています。



(競技用 IRB:サンダーキャット モーター:トーハツ 2 スト・25 馬力。全て新品。その後各 AU クラブが購入予定と)



10.感想と今後参加される審判へのメッセージ

【感じたこと】(僕はすでに世界レベル！競技役員我々がもっと大会を楽しもう！)

私自身は初めての世界大会参加でした。希望通り、日頃行っている IRB 関連を推薦いただいたおかげで、事前の不安はありませんでしたが、自分自身非常に多くのことを改めて感じ想った 2 週間でした。ご一緒いただいた齊藤愛子さんコメントと共通するところ大ですので、以下別の角度からコメント申し上げます。

・全体を比して、我々日本でのジャッジ運営力も全く劣るところもなく、むしろ、きっちりカッチリきめ細かい部分は、おそらく上に行くところがあると思います。ただ、良し悪しともかく、全体の「臨機応変」力と選手に対してもジャッジ間においても「楽しもうぜ」という競技役員のみなさんの笑顔が、圧巻の違いかなど。好きで集まったみなさんだから当然なのかもしれませんが、この部分、今後の日本での研究の必要性を感じます。また、安全と各条件さえ許されれば、ガチガチになりがちなルール運用にとらわれず、もっと自由に運営しても良いのだなあ、ふと考えた次第です。もちろん笑顔で。

・水回り (IRB/Water safety) のやり方は少しずつですが異なりますが、行っていること、安全を第一に スムーズな大会運営を心がるといえる考え方は、全く同一であることを確信しました。加えて自分たちも自ら楽しもうという気概強く感じることができました。この部分は、やっていること、考え方は、まったく一緒なんだなあ。違和感まるでなしですね。

・各エリア 1xIRB ジャッジ 2 名/日は、少人数での大会運営を可能となるでしょうが、その分、忍耐含めた体力や経験値が必要となります。まさに慣れたあのメンバーだからこそ可能なシフト・分業とも感じました。現在我々は、競技ごとにドライバー/クルーを交代、各人より経験値を上げてもらうことに主眼を置いています。ジャッジもするし距離測量・ブイ調整も行います。どちらが良いかは別として、現在の日本における水回りメンバーの経験値 Up なくして安全かつスムーズな Ocean 競技運営は困難と考えますと、今後、各地方同日開催など大会数増加に備えた、経験あるオペレーター育成が引き続き必要だと信じます。そこからすると、まずは引き続き今まで通りの方針で進めていくべきだろうと感じました。日本スタイルもアナガチ見劣りしていないことに自信が持てたのではないのでしょうか。

・上述と重複します。他エリアの競技役員も同様と思いますが、「皆、なぜまたこの場に戻ってくるのか、集ってくるのか」を深く理解納得することができました。かつて初代理事長金子先輩より「平ちゃん、Lifesaving は Friendship なんだよね」の言葉が蘇ります。同様の雰囲気を国内大会でも競技役員の皆様に感じていただくこと、そういった雰囲気を積み重ね、歴史を創っていくことの重要性を感じました。

・最後になりますが、競技役員としてご推薦・派遣いただきましたこと、大いなる感謝でしかありません。

改めて JLA 関係者の皆様すべてに、深く御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。 (この場を借り、所属西浜 SLSC、ご一緒できた日本からの競技役員の皆様へ、併せ

て大いなる感謝を申し上げます)

今回見て聞いて感じ想った事柄について、今後の日本での業界発展、大会運営向上に大いに繋げていこうと強く考えております。継続は力なり。引き続き何卒よろしくお願い申し上げます。

改めてありがとうございました。(平藤昌寛)

【感動のムーブメントをたくさんの人と共有できる世界大会の醍醐味】

私は前回 LWC に続き、今回 2 回目の審判参加でした。前はプール審判のみで、オープンとユースの大会が終わった後すぐに会場を離れてしまったのですが、今年は開会式から閉会式まで 18 日間アデレードに滞在して LWC を満喫しました。LWC にはマスターズ、ナショナルチーム、インタークラブ、IRB、Surf Boat と様々なイベントがあり、それぞれが自分の興味関心のある場所で LWC を楽しんでいる、必ずしも競技の結果を出すことだけが目的ではなく、人との交流を楽しんでいる、という印象がとても強いです。

審判として参加して思うのは、本当に誰もが心の底から審判を、大会そのものを楽しんでいるということです。さらに、大会に付随して行われる各種イベント、交流の機会というのが非常に多く、世界各国の審判と友達になることができます。ルールは世界共通なのでルールをしっかりと把握して臨めばジャッジのポイントで迷うことはありませんし、自分の経験と知識に見合ったポジションにあててくれるので、C 級審判以上であれば誰でも臆することなく参加できると思います。楽しんでいるかな？困ってないかな？と互いに気を配り、本当に居心地のよい仲間ができるので、ぜひ多くの人に審判として LWC に行ってほしいです。

また、日本代表チームのレース、世界トップレベルのレースをみることも、興奮だけでなく非常に勉強になります。「ああ、私もがんばろう！」と気持ちが鼓舞されてプラスの力がどんどん沸いてきます。こういったわくわくする気持ちを体感できるのも、LWC の醍醐味だと思います。日本代表選手からは「日本のオフィシャルがいると安心します」と声をかけていただいたり、SANYO CUP など日本に来たことのある選手や審判からは「久しぶり愛子！また日本に行きたいな。」とハグで再会を喜んだり、一つ一つの言葉、笑顔、出会い、再会が、本当に居心地よく、また私もこの場にいられるようにいろいろなことをがんばろう、そしてこの幸せな感じを多くの人に体感してもらえるように多くの人に伝えていこう、と思うのです。

結びになりますが、日本ライフセービング協会派遣審判として LWC2018 に派遣して下さい、どうもありがとうございました。日本ライフセービング協会、所属する大竹サーフライフセービングクラブのご理解とご協力には本当に感謝しております。ここで得た経験を、日本のライフセービングのあらゆる分野での発展に活かすことができるよう、努めたいと思います。(齊藤愛子)